

山形県米沢市日朝寺安置五輪塔の一考察

——その由来とその意義について——

玉木 晃 仁



【はじめに】

吉祥山日朝寺は、米沢藩初代藩主 上杉景勝公（一五五六～一六二三）寄進の上杉家ゆかりの寺院である。^{*1} 日朝寺境内に佇んでいる五輪塔について多くの方々に聞かれた。^{*2} それが五輪塔への興味の端緒である。正確な大きさは不明であるが、高さ約四メートル超くらい位ある。五輪塔は全国の仏教寺院に点在し、日蓮宗寺院にも新旧多種の五輪塔が確認できる。勿論これから調査・検証の必要はあるが、大きさは日蓮宗最大級の五輪塔であると思う。小稿は、日朝寺安置の五輪塔の由来と意義について考察したものである。

【日朝寺五輪塔の由来について】

明治二十八年（一八九五）一月八日付けの『米沢新報』第二十三号に

日朝寺本堂落成について報道されている。^{*3} 記事を整理すると、日朝寺落慶式が近々挙行される。松原獄門場の場所に、鉄道敷設のため煉瓦工場を建設する。敷地内の地藏尊と五輪塔を日朝寺へ移動し大施餓鬼会を施行される予定。上杉家統治時代、松原獄門場で一千五百人余が処刑執行されたのだという。特筆すべきは五輪塔で、高さ五尺余りの大石を刻印し積み上げている。以上要略

この新聞報道以外、移動に至った経緯は不明である。正確な移動日時・運送方法・発願者も判明していない。謎の多い五輪塔なのである。米沢市は、長尾上杉氏・またその統治についての古文書資料保持に力を入れている自治体であるが、処刑場の記述は確認できない。米沢新報の記者が江戸時代の死刑執行された数が一千五百人余りとした根拠資料も確認できなかった。また地藏尊は、現在日朝寺には安置されていない。

明治二十七年（一八九四）に勸進目的で制作された本堂建築八千圓見積（左頁図）の挿絵には地藏尊はない。さらに五輪塔の正面に「日・蓮・大・菩・薩」と刻まれ、残り三方は刻まれていない。しかし実物は四方に刻印されている。これは日朝寺に移されたときに刻まれたと思われる。移動とともに新たに法華経・日蓮宗の五輪塔に改めたのである。刻印は

右面	頭	喉	胸	胎	足
正面	日	蓮	大	菩	薩
左面	肝	法	心	腎	脾
後面	妙	肺	蓮	華	経

とある。刻印するとき、根拠にした書物は判らない。日蓮系教団では、五輪塔の意義を今日偽書と判明している『御義口伝』^{*4}に求める場合が多い。南無妙法蓮華経・第三 唯以一大事因縁事（方便品）・第六 五番神呪を表にし検討してみる。^{*5}

積見圖千八築建堂本

一乘妙興貴利子星宿族近依奉召朝寺高階交八年九月廿五日親去住漢之法顯四十二百中或竟
 鎮金歸府於北魏高祀碑危可專奉宗大觀寺臺置金泥沙門至善觀寺出經堂寺前祖師殿佛堂碑
 際石在日布大規門不奉寺時會畫移后年本寺廢後則現地是也奉德德美之長門八關本堂
 附建物寺金備之名焉呼各或再祖已本亦名碑本寺主奉類承實本寺官寺竟現佛殿以改廢應
 明四碑及二碑什畢名初終焉有歸治將擇信因疑云致了衣緣維持見以難際明治十年建田家寺
 住職云退本不月日果仔日觀寺住職在刻華自會受念之日後修教寺務使爭請山臺莊有日思定而父余奉
 字三寺寺附以奉本寺門再修漸次護寺修延之
 粗覽德化嚴信者改宗之畫教自念之及以
 將視者奉本臺無志登殿本為之據請修
 懷養復開田圖本臺畫祭是偏日具
 享當已十五天不國家德
 尊本寺聖佛指指為
 開據公當寺有碑
 諸主實定現是
 后生續願之是
 諸德本也

皇和明治十七年聖夏報日再建
 羽陽米堂在寺門山日朝寺
 九孔
 傳燈二十世王木日兒
 下此寺向名山本堂建奉主華發長
 寺主奉之孔
 江保宜宗
 皆川吉兵衛
 和國虎松
 助松



本堂建築圖

薩 達摩 芬陀梨伽 蘇多覽

一 大 事 因 縁

法華經 華嚴 中間三昧

妙 法 蓮 華 經

頭 喉 胸 胎 足

十羅刹女 持国天王 增長天王 広目天王 毘沙門天王

比較してみると、正面に「日蓮大菩薩」とあること、「肝・肺・心・腎・脾」の五臓の配当を『御義口伝』には確認できない。修法師の口伝・切り紙相承を参考にして文字を選んだのかもしれないが、典拠書物の特定はできない。

刻字にも疑問がある。後面「妙・肺・蓮・華・経」左面「肝・法・心・腎・脾」と肺と法が入れ違っている。単純に間違えたのか。可能性は、そればかりではない。米沢では、旧家の多くに建物・造形物・墓碑等を完璧には作らない場合がある。完成したものを作るとそれ以降の発展がない。少し不便な方が、思考が充実するとした思想文化がある。関連事例として上杉家菩提寺 法音寺に安置されている二代藩主上杉定勝（一六〇四～一六四五）と四代藩主上杉綱憲（一六六四～一七〇三）の廟所前の灯籠が上弦の月にされている。満月にしないのは、ただ欠けるだけで、それを避ける意図があったのだという。

二十六世玉木日晷（一八四九～一九二七）の日朝寺復興の象徴ともいえる五輪塔である。こうした意図もあったのかもしれない。また妙法蓮華経を正面に配置しなかったのは、玉木日晷は祖師信仰による布教を行っていたと伝わっている。それが影響したのかもしれない。

【日蓮聖人遺文から五輪塔の意義を探る】

小稿は、五輪塔全般の考察が目的ではない。関連部分のみの紹介に留める。^{*6}

狭川真一氏は、五輪塔研究史の概要を示して、五輪塔の出現した時期は、一二世紀前半から一三世紀後半頃までで、時代区分では概ね鎌倉時代中頃までが該当するとしている。^{*7}

川勝政太郎（一九〇五―一九八三）によると、「元来、五輪塔は密教において胎藏界大日如来の三昧耶形とされ、五輪塔そのものが胎藏大日を象徴するものであるが、この塔形は早くから宗派を超えてわが国人に親しまれるようになったので、実際遺品について見ると、いろいろの場合が造設されている」^{*8}さらに「梵字の代わりに「地・水・火・風・空」の漢字を各論にあらわすものは、室町中期の享祿三年（一五三〇）の法華寺墓域一石五輪塔（大阪府堺市鉢ヶ峰公園墓地）などが古い例で、江戸時代には多くの例を見るようになる」^{*9}のだという。また日蓮宗で最も古い五輪塔は、建立時期は不明である。興味深いところで、六老僧の日頂（富士宮市 正林寺）・棧敷女房（鎌倉常栄寺）の供養塔が五輪塔である。これらを含め宗門の五輪塔調査の必要性を感じた。

五輪塔の記述は御遺文に確認できないが、実見した可能性は高い。狭川真一氏の前掲論文所収の「第一表 出現期の五輪塔一覧表」には、平安期から日蓮聖人の活躍した時代を含め網羅している。表によると、刻まれた文字は無字以外は全て梵字の真言で、法華経の文字は一切確認できないのである。

真言との関係で日蓮聖人が京都で書写した覚鏤（一〇九五―一一四四）『五輪九字明秘密釈』の五輪観の思想と五輪塔に関係があると指摘した研究論文が多数ある。また聖人は真言密教に多くの批判をされている。しかし覚鏤には触れられていない。それを含め後の課題とさせて頂く。

五輪観とは、五輪成仏の略。五輪（五大。地・水・火・風・空）を自身の五処（頂・面・胸・臍・膝）に観じて、

即身成仏を期す真言の觀法^{*10}である。それに対し『開目抄』に

仏になる道は華嚴唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪觀等も実には叶べしともみへず。但天台の一
念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。(『定遺』六〇四頁)

聖人は、五輪觀の修行を否定されている。日蓮宗の五輪塔が五輪觀に基づく塔と定義されると仮定すれば、宗祖の意思に反している存在ということになる。

日蓮聖人は法華經を色読され、見宝塔品第十一から囑累品第二十二までの虚空会を圖顕化したのが曼荼羅であり、重要視された。虚空会では、宝塔が出現している。宝塔について『阿仏坊御書』に

末法に入て、法華經を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり。若然者貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經
ととなるものは、我身宝塔にして、我身又多宝如来也。妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔
なり。宝塔又南無妙法蓮華經也。今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり。此五大は題目の五字也。然者阿仏
房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、此より外の才覚無益なり。(『定遺』一一四四頁)

宝塔は、地水火風空の五大であり題目であり多宝如来である。発展解釈すれば、虚空会に出現した宝塔が五輪塔であり、日蓮宗の五輪塔建立の根拠とすることもできる。しかし明確に地水火風空の五大が記されている遺文は、『阿仏坊御書』のみである。^{*11}ただし真蹟は存在しない。史実として日蓮聖人の思想を探る規則がある。身延山久遠寺『昭和定本日蓮聖人遺文』から真蹟遺文・真跡断片がある。直弟子の写本がある。明治八年身延山大火前に曾て身延山にあつた遺文を用いる。この規則に照らし合わせると御遺文から宝塔の根拠は存在しなくなる。さらに浅井要麟^{*12}(一八八三〜一九四二)が僅かに疑問を呈しているようであるが、これ以上真偽について言及できないのが現状のようである。以上を纏めると、日蓮宗の五輪塔は、定義がない曖昧な存在であると思われる。

【結び】

墓石カタログの多くに、日蓮宗の五輪塔なるものがあり、建立を勧めている。曖昧な位置の五輪塔の対応を考えるようになった。日蓮宗に対処するべき指標もない。付随して最古または最大規模の五輪塔の所在地はどこなのか？曖昧な存在ゆえに調査さえも行っていないように感じる。日蓮宗寺院に由緒ある多くの五輪塔がある。発願した先師・檀信徒の願いの調査に意義を感じるが、現実問題難しい。

米沢日朝寺の五輪塔が宗門最大級と名乗ると、反応があり面白いと思ったのだが、正確な計測の仕方・定義を御存知な方は教えて頂きたい。玉木日晃により改められた日蓮宗の五輪塔、日蓮聖人遺文から意義の確認を試みたのだが、不十分な感は拭えない。しかし五輪塔の意義を考える良い機会であったと思う。

*1 拙稿「米沢吉祥山日朝寺の歴史に挑む」『温故』第四十一号 米沢温故会 を参照

*2 寺院群都市首長会議 寺町サミットの会場寺院になる。「第十八回 寺町サミットイン米沢 人と人を繋ぐ町づくり」をテーマに事例発表、各都市首長による議論。平成二四年一〇月五〜六日 飯山（長野）、金沢・小松・七尾（石川）高岡（富山）上越（新潟）岐阜、米沢の全国八都市加盟二四〇名以上の方が来山。その他多くの団体が、日朝寺に来山された。

発表レジメでは詳細に記した。紙面の都合で割愛

*3 『米沢新報』明治二十八年一月八日 第二十三号（市立米沢図書館所蔵）「●日朝寺本堂の落成 今町の同寺ハ往古上杉景勝公の御代公に従伴し越後の高田より曆遷せしものなるが彼の享保年中立山三明院より發火せる祝融の為に全市殆ど一朝よして惨恒たる焦土と化し古史を繙き今に之を追思すれば轉た酸鼻悲哀に堪へざるもるあり其際同寺も不幸にして類焼し爾后今日迄晋請の運びに至らざりしが同寺の住職玉木日晃氏の斡旋盡力に依り漸く其晋請の成功を見るに至れり巍然たる高

閣天に聳ひ宏潤たる建礎地に漫り一目清浄爽感を慈き起す斗りなり就て其落成式を近々舉行せらると由なるが彼の松原獄門場を這般鐵道敷設の爲め煉瓦製造場に使用することとなりしを以て右に安置せる地藏尊並に五輪塔等を悉く移置し大施餓鬼を施行せらるる筈の由なるが聞く処に依れば同獄門場に於て處刑せられしものは一千五百有余の多きなりと定めし此大施餓鬼の爲め地下に瞑目し得べけん因に記す同寺本堂の構造と高さ五丈八尺余奥行間口八間四尺四方の大且つ廣くして殊に珍しきは五輪塔なり其高さ壹丈五尺余の大石を以て刻み建てたるものなりと云ふ」(全文掲載)

*4 執行海秀(一九〇七〜六八)によって、六老僧の日興(一二四六〜一三三三)の著作とされていた『御義口伝』は偽書と今日認定されているが、それまで日蓮宗では重要な位置であった。『大正藏経 八四』にも収められている。日蓮系教団では、現在でも重要な著作と扱われている場合もある。詳しくは執行海秀『御義口伝の研究』、『日蓮宗事典』御義口伝の項を参照

*5 『定遺』二六〇五頁・二六一五頁・二六九六頁

*6 五輪塔を含め石造物について、平重衡の南都焼討によって消失した東大寺を、重源(一一二一〜一二〇六)の勧進により復興した。その際、宋から石工を招いた。その展開は、山川均『石造物が語る中世職能集団』に詳しい。また五輪塔の発展展開に、日蓮聖人と同時代で関係のある良寛房忍性(一二一七〜一三〇三)が普及に大きな役割を果たしたことについても記されている。

*7 狭川真一『五輪塔の成立とその背景』、『元興寺文化財研究所研究報告二〇〇一』の、二、五輪塔の研究史の概要で研究者の説を紹介し、さらに全国の出現期の五輪塔の一覧表も作成されている。

*8 川勝政太郎『新版 石造美術』二二二頁

*9 同右 一二五頁

*10 『日蓮聖人遺文辞典 教学編』三三七頁

*11 日蓮聖人は、五大(地・水・火・風・空)を認識していた。書写した『五輪九字明秘密釈』に記されている。配当について『戒之事』(『定遺』二二二頁、真蹟三島本覚寺)があるが、水と火のみである。『昭和定本日蓮聖人遺文』三巻に続

編として所収の遺文は偽書の可能性が高い。統編の『戒法門』（『定遺』一九三四頁）に配当が記されている。真蹟ではないが『生死一大事血脈鈔』（『定遺』五二四頁）に文脈から確認できる。ただし「空」は記されていない。

*12 浅井要麟は、『阿佛房御書』について、「文永九年三月塚原に在つて阿佛房に送られた消息と云ひ、また建治二年身延からともいはれてゐるが、その他にも不審の點が甚だ多い。（後略）」日蓮聖人遺文全集改題『昭和新修 日蓮聖人遺文全集 別巻』二〇九頁

本堂建築八千圓見積を日朝寺檀徒加藤利夫様に寄贈して頂きましたこと。米沢市郷土史を同檀徒佐藤由美子様の示唆・教示を得ましたこと。御礼申し上げます。